

加齢研ニュース

令和5年6月1日
東北大学加齢医学研究所
研究会同窓会発行

【所長室便り】

田 中 耕 三

2023年4月1日付けで加齢医学研究所所長を拝命いたしました。総長から辞令をいただき、着慣れないモーニングを着て入学式にも出席して参りました。9年間所長を務められました川島隆太前所長の後任として、加齢研の前身である抗酸菌病研究所も含めて18代目の所長となります。教職員の皆様、同窓会の皆様、どうぞよろしくお願い申し上げます。

川島前所長は、歴代最長の任期の中で、スマートエイジング学際重点研究センター・非臨床試験推進センター・環境ストレス老化研究センターの設置、動物実験施設の移転、教員人件費の効率化係数の均てん化など、多くの事業を成し遂げられ、加齢研の加齢医学拠点としての地位を確固たるものとされました。私は9年間運営会議メンバーとして、川島先生の運営を間近で拝見してきましたが、次から次に繰り出される先を見通した変幻自在のアイデアに、必死についていくという状況でした。川島先生の書

かれた所長室便りを読み返すと、いかに加齢研の将来を考え、計画的に様々な事業を推し進められてきたかということがよくわかり、あらためてその偉大さを感じると共に、それを記録に留める加齢研ニュースの重要性にも気付かされた次第です。私は2007年にテニユアトラック准教授として、留学していた英国スコットランドから加齢研へやって参りました。以後16年間お世話になってきた加齢研に少しでも恩返しすべく、身の丈を超えた責務を果たしていく所存です。まだ就任していくらも経っていませんが、周りの景色がこれまでとは違って見え、これまで多少は運営に関与してきたつもりでも、実際にはよくわかっていなかったのだと思い知らされています。高橋事務長はじめ、事務の皆様方の手厚いサポートには、感謝の言葉もありません。

私の所長としての最大の仕事は、加齢研の将来を担う人材をリクルートすることです。これまで加齢研を支えてこられた多くの先生方が、ここ数年でご定年を迎えられるのに合わせて、新たな血を入れていかなければなりません。川

加齢研ニュース 第79号 目次

所長室便り (田中 耕三)	1
分野紹介 (遺伝子発現制御分野)	3
随 想 (高井 俊行)	4
研究会便り (宇井 彩子)	6
所内人事消息	9
研究会同窓会広報 (山家 智之)	11
編集後記	13

島前所長がリクルートされた先生方は、いずれも現在目覚ましい活躍をされているまさに次世代を担う研究者であり、この流れを継続すべく新執行部一同知恵を絞っております。研究所のミッションとしての加齢医学研究を推進していくのはもちろんですが、研究の方向性・方法論・卓越性・異分野融合・産学連携・ダイバーシティなどの様々な要素を勘案しながら、10年後、20年後を見据えた判断が求められます。私が研究者を志した時代と今では、研究のトレンドは大きく様変わりしており、さらに次の世代にどのような研究を推進していくべきなのか、自分の物差しが果たしてそれを見極められるのか自問自答しながら、未来の加齢研への責任と向き合っています。もう1つの大きな仕事は、旧動物舎の改修です。これは川島前所長が、長年にわたって構想を練られ、着実に準備を進めて来られた一大事業です。多大なご尽力のもとお膳立てしていただいたこの事業を、今後長年にわたって加齢研の顔となるような建物へと、形にしていかなければなりません。地域コミュニティに開かれた加齢医学研究の拠点として、また星陵地区における産学連携の拠点としての提案を、現在概算要求として申請しているところです。

大学を取り巻く状況は、少子高齢化が進む中で年々厳しさを増しており、予算が削減される中で世界における日本の研究力の低下も懸念されています。この状況を打破すべく、いわゆる10兆円ファンドによる限られた大学への集中的な支援策が打ち出され、長い議論を経て国際卓越研究大学の募集に至り、3月末で東北大学を含む10校の応募が出揃ったところです。国際卓越研究大学の申請にあたっては、学生への支援・研究力強化・ガバナンスの強化など様々な提案がなされています。しかし、実際にこの制度が動き出した時に、国際卓越研究大学に選ばれた大学、選ばれなかった大学で、具体的に

どのようなことが起こるのか、個々の部局・個々の研究者にどのような影響があるのかについては、誰も明確には予測できていないというのが本当のところかと思います。昨日と同じことをしていればこれからも安泰というわけにはいかない時代の中で、何が起こるか常にアンテナを高くしながらも、予想外のことが起こることを想定に入れながら荒波を乗り切っていくという難しい舵取りが迫られます。教員一人一人も一層厳しい競争の中にさらされることと思われませんが、その中でいかにベストなパフォーマンスを発揮し、それぞれがスキルアップ・キャリアアップできるよう力を尽くしたいと思います。65歳以上の高齢者率が30%に迫ろうとする超高齢社会の我が国において、加齢医学研究所の求められる役割はますます大きくなっています。本橋副所長がセンター長を務める環境ストレス老化研究センターで、呼気診断技術開発のための研究協力者を募ったところ、数日のうちに300名もの応募があったとのことで、加齢医学研究に対する期待の大きさを感じています。

さて3年間にわたって私たちの生活に大きな影響を及ぼしてきた、新型コロナウイルスの流行に、ようやく収束の兆しが見えてきました。東北大学のBCPレベルは、4月1日づけで0となりました。すなわち原則として、通常の研究活動ができるようになりました。マスクの取扱いは個人の判断となり、卒業式や入学式も対面で行うことができるようになったのは、大変喜ばしいことです。この3年間に私たちは様々なことを学び、オンラインツールは距離や時間を超えて、コミュニケーションの幅を飛躍的に広げました。しかし川島先生が、オンラインコミュニケーションでは心と心がつながらないという研究結果を出されているように、この3年間対面での行事が著しく制限されてきたことで、失われてきたものもあると思います。ほとんど対面の行事を体験せず、他の研究室の学

生との交流もないまま卒業していった学生もおりました。今後は感染の再拡大に十分留意しつつ、新人歓迎会や園遊会といった対面の行事を再開し、研究室の垣根を超えた交流を盛んにして、研究所としての一体感を作っていければと考えています。

人事消息です。遺伝子導入研究分野の高井俊行教授が、3月にご定年を迎えられました。高井先生は、1980年に岡山大学薬学部を卒業後、京都大学大学院医学系研究科の沼正作先生の研究室で学位を取得されました。その後国立循環器病センター研究所、岡山大学工学部を経て1997年に加齢研に教授として着任されました。1992-3年には米国スローン・ケタリング研究所にご留学され、まだ黎明期の遺伝子ノックアウトの技術を日本に持ち帰っておられます。高井先生は、制御性受容体による免疫制御機構とアレルギー・自己免疫疾患、がん等の疾患発症機構の解明、および創薬・治療法の構築を行なわれ、免疫制御機構に新たな研究領域を開拓されました。2004年には第7回日本免疫学会賞、2012年には文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞されておられます。高井先生は、サイエンスはもちろんのこと、スポーツでは水泳・自転車・マラソンをアマチュアの域を超えたレベルでこなされ、音楽ではピアノやバイオリンをたしなまれるという、加齢研のモットーを体現した老化とは無縁の先生です。佐竹前々所長と3人でマレーシア大学を訪問し、クアラルンプールの街を歩いたことを懐かしく思い出します。これからも特任教授（研究）として制御性受容体を標的とした創薬研究をされるということで、益々のご活躍をお祈りいたします。

【分野紹介】

遺伝子発現制御分野

遺伝子発現制御分野は今年で発足から10年

を迎えました。レドックス代謝と転写制御による生体のストレス応答機構の解明を大きな目標にしています。2013年の春、助教として着任してくれた田口恵子さんと北村大志さん、技術補助員の太田奈緒さん、秘書の今野素子さん、そして4人の大学院生での出発でした。現在は、講師の関根弘樹さん、助教の村上昌平さん、岡崎慶斗さん、学術振興会特別研究員の河口まどかさん、中外創薬科学の支援を受けているポストドクのMorshed Alamさんが研究室のスタッフとして個性豊かな研究を展開しています。太田さんと今野さんには、研究室の立ち上げ当初から変わらず、研究室の基盤を支えてもらっています。大学院生は全員で11人、そのうち博士課程は8人、修士課程は3人です。博士課程の6人は臨床分野の先生がたとの共同研究として私の分野に派遣されてきている学生たちです。研究室の一人ひとりがそれぞれの目標に向かって鋭意努力しつつ（と、思っています!）、異なるExpertiseを持つメンバーが有機的につながって、とてもよい雰囲気の研究室になっていると自負しています。

私が加齢研に着任してからの10年間で得られた研究成果は、KEAP1-NRF2制御系による抗老化作用、NRF2活性化がんの悪性化機構の解明、NRF2によるミトコンドリア機能制御、これら3つに要約することができます。KEAP1-NRF2制御系は、生体における酸化ストレス応答で中心的役割を果たしています。NRF2は強力な転写活性化因子であり、KEAP1はその抑制性制御因子です。1つめは、加齢研に研究の場をいただいたからには、加齢研のミッションである健康長寿の実現に資する研究をしたいと考え、NRF2の活性化が個体レベルで抗老化作用を有することを明らかにしました。2つ目は、NRF2が異常に活性化している難治性がんの悪性化機構の新たな理解です。本来一過性に活性化すべきNRF2が恒常的に活性化す

ることで生じる転写因子ネットワークの変化とそれによるエピゲノムの改変が、がんの悪性化に大きく貢献していることを見出しました。3つめは、NRF2によるミトコンドリア機能の促進機構の解明です。NRF2とミトコンドリアの関係には明快な説明がなされていませんでしたが、近年新たな生体分子として見いだされた超硫黄分子の代謝を考慮することで、その理解が可能になりました。

次に、現在取り組んでいる3つのテーマを紹介します。一つは、新たなストレス応答機構の探索と解明です。最近、低酸素応答の新しい分子機構を見出しました。有名なPHD-HIF経路は、細胞が低酸素に曝露されたとき、速やかに反応するシステムですが、細胞が慢性的な低酸素状態に曝される場合には、それとは全く異なるシステムが稼働することがわかりました。また、これまでテーマにしてきた転写因子NRF2の活性化に必要な新たな因子の存在もわかってきており、その作用機構の解明に挑んでいます。2つ目は、新たな生体分子として見いだされた超硫黄分子の生体における機能の解明です。各種遺伝子改変マウスを用いて、超硫黄分子とその代謝物が、生体の恒常性維持や発生・分化などにおいて果たす役割を明らかにしようとしています。多くのマウスを飼育する必要があるテーマで、加齢研の動物施設には大変お世話になっています。3つ目は、NRF2活性化がんの克服を目指し、特に、抗腫瘍免疫との関係を調べています。NRF2ががん細胞で活性化すると、抗がん剤や放射線に対して抵抗性になり、糖代謝やアミノ酸代謝の変化から腫瘍増殖が促進され、エピゲノムの変化からがんの幹細胞性が増強することを見出してきました。近年、NRF2活性化がんは、免疫療法に対しても抵抗性であることが報告されています。私達はその原因を知りたいと考えて、呼吸器外科の岡田克典先生や、病理学の鈴木貴先生との共同研究で、

肺がん患者さんの検体を調べさせていただき、そこで観察される病態を再現できるマウスモデルの作成を行い、メカニズムの解明に挑んでいます。

最後に、加齢研の環境ストレス老化研究センター（CERA）のプロジェクトへの参加を紹介いたします。CERAプロジェクトの一つの柱は、ストレス負荷加齢マウスの作成と供給です。高脂肪食の負荷や、運動負荷といったストレス負荷の状態を加齢させるマウスの作成は助教の村上さんがリーダーシップを発揮してすすめています。昨年6月から飼育を開始しているので、来年6月から、順次、2年齢のマウスが出来上がってきます。2つめの柱は、呼吸診断技術の開発です。呼吸凝縮液はまだほとんど利用されていない生体試料であることから、血漿とペアで分析し、生体情報を反映するバイオマーカーを取得することを目指しています。魏范研先生と河岡慎平先生と協力して、今年の4月に、血液と呼吸凝縮液の提供をしてもらえる健常ボランティアを募集したところ、なんと、募集開始から数日で目標の300人を超える応募がありました。現役医師である助教の岡崎さんのリーダーシップのもと、現役医師の大学院生たちに協力をしてもらい、検体収集を開始予定です。

以上、加齢研ブランドの研究の展開と研究インフラの構築に貢献できるよう精進する所存です。

（文責：本橋ほづみ）

【随 想】

定年退職ご挨拶

遺伝子導入研究分野
高井俊行

加齢研の同窓諸兄にご挨拶申し上げます。このたび2023年3月をもちまして、25年半勤めた加齢医学研究所遺伝子導入研究分野教授を定

年退職致しました。また、4月より新たに同分野特任教授（研究）に再採用されました。

加齢研に赴任する前は岡山大学工学部生物応用工学でリンパ球への遺伝子導入法の開発を行っていましたが、遺伝子導入のその先を行く技術である遺伝子ノックアウト法を幸運にも米国スローン・ケタリング研究所で一年間、習得する機会を得ました。帰国後、公募があった加齢研の教授職に運良く採用され、1997年秋に赴任しました。赴任当初から先輩教授の先生方に力強いバックアップを賜り、また岡山から仙台の地に一緒に移動して下さった学生・共同研究者諸氏に大いに助けられてラボの立ち上げは速やかに完了し、すぐにいくつかの免疫系レセプターなどのノックアウトマウスの開発と解析を進めることができました。爾來25年間、純粋に学問が好きなラボメンバー、たとえば理学部生物学科、医学系研究科や生命科学研究科の若い学生・大学院生の方々、医学部基礎修練の学生諸君、助教や講師の同僚の皆さま、事務スタッフの方々に恵まれ、一緒に仲良く研究を続けて来られたのは幸せでございました。

研究内容としては一貫して免疫制御レセプターのはたらきをアレルギーや自己免疫疾患、遺伝性疾患との関係において解析して参りました。この間、抑制性Fcレセプターや独自に発見した新しい抑制性レセプターの機能が不十分になることが、全身性エリテマトーデス（SLE）に代表されるような自己免疫疾患の素因となることを報告しました。またミエロイド系細胞に発現するLILRB4という抑制性レセプターがSLE患者の自己抗体を産生する病原性プラズマセル表面に異所性に高発現するという知見から、LILRB4発現が病原性を持つ意外な一面も大学病院の先生方とのコラボで報告することができました。このような免疫機構の変調が骨形成や認知症にも関与する可能性を示すこともできました。

さて、負の方向への免疫制御は、生体が本来持っているがんに対してはたらく免疫を弱める、というコンセプトはかなり以前から指摘されていましたが、CTLA-4という抑制性レセプターを阻害すると、がんに着効があることを示したのが、スローン・ケタリング研究所にも在籍したJames Allison博士で、彼はCTLA-4の負の免疫制御を「免疫チェックポイント」と表現しました。ご存知のように京都大学で同じくPD-1という抑制性レセプターを研究し、がん免疫の増強に応用できることを示した本庶佑先生とともに2018年にノーベル賞を受賞されています。このような経緯で、私たちの研究していたLILRB4もがん免疫に関与するのではないかという単純な発想で調べてみますと、明らかにこれを阻害するとがん免疫が増強しました。同時期に私たちは独自に、20年ほど謎のまま残されていたLILRB4の生理的リガンドタンパク質が、フィブロネクチンN末端30キログルトン（FN30）であることを突き止めました。私たちはFN30とLILRB4の結合阻害ががんやSLEの抗体医薬として社会実装される可能性に期待して特許を申請しておりましたところ、紆余曲折はあったものの運良く米国の製薬企業に導出でき、免疫チェックポイントLILRB4のがん抗体医薬は2022年から第I相臨床試験に入りました。ゆくゆくは有効性が確認されて実際にがん患者さまにお届けできる日が来ることを切に願っています。さらに私たちはLILRB4とFN30の結合がどのように免疫制御につながるのかの解析を進め、細胞接着・運動・増殖の要のレセプターとして知られているインテグリンを制御することを突き止め、このような作用分子をFocal Adhesion Integrin Inhibitorsという意味でFAIN（ファイイン）と名付け、その全容の解明を目指しています。

決して順風満帆ではない部分も多かったラボの歴史の中で、常に素晴らしいの方々との出会い

やご縁があり、周囲の先生方のお力を頂いて壁を乗り越えることができたのは幸運以外の何ものでもありません。このことは2023年2月3日の医学系研究科での最終講義で『免疫制御受容体の研究と創薬－幸運に恵まれて』と題してお話しさせて頂きました。医学系研究科ウェブサイトのNEWS欄3月6日のお知らせからURLを辿って頂ければ今年いっぱいYouTubeで公開されています。また生命科学研究科で頂いた3月3日の最終講義の機会には、がん免疫の研究を真正面から取り組む姿勢に消極的だった自身の「偏見・先入観・不勉強」などを取返して振り返り、『(上記と同タイトル)－私の反省』と題してお話ししました。そして3月10日の加齢研退職教授記念講演では『(同上)－研究者の本懐とは』と題して、ご縁をいただいた皆様にお礼を述べつつ、自分が40年に亘って研究を続けて来ることのできた心の中を解析し、お話しさせて頂きました。

この4月からは、ラボを縮小しながら維持し、残り少ない研究生生活の仕上げとして免疫制御レセプターを標的にした創薬研究を続けております。1～2年の短い期間ではありますが、引き続き宜しくご指導頂けますようお願い致します。

【研究員会便り】

研究員会委員長 宇井 彩子

令和4年1月から委員長をさせて頂いております、分子腫瘍学研究分野の宇井彩子です。昨秋より副委員長に基礎加齢研究分野の白川龍太郎先生が就任されました。また、今年度より生体情報解析分野の依田真由子先生が新たに加入され、さらに臨床腫瘍学分野は若山翔之介先生、応用脳科学研究分野は松崎泰先生、人間脳科学研究分野は大方翔貴先生、医用細胞資源センターは林陽平先生に交代されました。今年度も皆様のご要望ご意見を幅広く活かせるように取

り組んでいきたいと思っております。ご要望やご意見がございましたら、いつでもお気軽にお近くの研究員会にお声がけ頂ければと存じます。引き続き、ご協力を賜りますようお願い致します。

研究員会活動内容 (R4.12～R5.5まで)

1. スポーツ大会について

加齢研スポーツ大会につきまして、12/15(木)13時より星陵体育館にて開催いたしました。計34名の教職員および学生にご参加頂き、交流を深める良い機会となりました。

2. 令和4年度研究所若手アンサンブルプロジェクトについて

2月に研究所若手アンサンブルグラント、第2ステージの審査会が行われました。計5件の申請について、オンライン形式での発表が行われ、参加者による活発な議論が交わされました。参加者投票により第2ステージ採択課題2件(100万円/課題)が決定されました。来年度も部局間共同研究を支援する「2023年度東北大学若手研究者アンサンブルグラント」(Ensemble Grants for Early Career Researchers 2023)の公募が行われますので、加齢研の皆様も奮ってご応募ください。また今年度より、WG加齢研委員は家村顕自先生(分子腫瘍学研究分野)に交代します。引き続き、アンサンブルプロジェクトをよろしくお願い致します。

令和4年度研究所若手アンサンブルプロジェクトWG加齢研委員 久保 純アンサンブルプロジェクトHP: <http://web.tohoku.ac.jp/aric/>

3. 令和4年度加齢研若手共同研究促進助成金について

令和4年度加齢研若手助成金は選考を終え、運営委員会と教授会で以下の4件について承認をいただき採択者に通知をいたしました。

1. 研究代表者：統合生理学研究分野 佐藤 亜希子先生
脳機能に着目した食餌制限による老化性睡眠変化改善メカニズムの解明
2. 研究代表者：呼吸器外科学分野 酒井 勁先生
ラット肺移植モデルを用いたグルタチオントリスルフィドによる虚血再灌流障害の抑制効果の検討
3. 研究代表者：分子腫瘍学研究分野 家村 顕自先生
アデノ随伴ウイルス利用した分裂期細胞可視化ツールボックスの構築
4. 研究代表者：神経機能情報研究分野 久保 純先生
サルコペニア治療のカギとなる E3 ユビキチンリガーゼの同定

4. 第 159 回集談会 (R5.2.10) での研究員会第 42 回発表コンテスト

令和 5 年 2 月 10 日 (金) 午後 1 時から開催されました第 159 回集談会での第 42 回研究員会発表コンテストの受賞者は第 1 位佐藤亜希子先生 (統合生理学研究分野), 第 2 位は河岡慎平先生 (生体情報解析分野) に決まりました。おめでとうございます。

5. 研究員会主催新年会

例年, 集談会終了後に開催しております研究員会主催新年会は新型コロナウイルス感染症拡大防止の為, 中止になりました。

6. 第 158 回集談会の第 41 回コンテストと第 159 回集談会の第 42 回コンテスト受賞者の表彰式について

3 月 8 日 (水) に心臓病電子医学分野研究室で野田祐資先生, 3 月 10 日 (金) に国際会議室で谷春菜先生 (モドミクス医学分野) と河岡

慎平先生 (生体情報解析分野) の表彰式を行いました。

また, 佐藤亜希子先生 (統合生理学研究分野) は 4 月以後に表彰式を行う予定です。

第 158 回集談会 第 41 回集談会コンテスト受賞

- 1 位 モドミクス医学分野 谷 春菜先生
- 2 位 心臓病電子医学分野 野田祐資先生

第 159 回集談会 第 42 回集談会コンテスト受賞

- 1 位 統合生理学研究分野 佐藤亜希子先生
- 2 位 生体情報解析分野 河岡慎平先生

7. 加齢研究員会主催 高井俊行教授退職記念講演について

加齢研究員会主催 高井俊行教授退職記念講演

日 時: 令和 5 年 3 月 10 日 (金) 午後 4 時～

場 所: スマート・エイジング棟国際会議室

講 師: 高井俊行

所 属: 東北大学加齢医学研究所 遺伝子導入研究分野

演 題: 免疫制御受容体の研究と創薬一研究者の本懐とは

連絡先: 蘇 美慈 (所属 遺伝子導入研究分野・内線 8504)

当日は研究発表セミナー係の 4 名の先生方が会場設営等を行いました。

8. 令和 4 年度加齢研交流セミナー

第 3 回加齢研交流セミナー 対面開催

日 時: 令和 4 年 12 月 23 日 (木) 16 時から 17 時 10 分

講 師: 腫瘍生物学分野 吉野優樹

講 師: 神経機能情報研究分野 久保 純

連絡先: 加齢医学研究所・研究員会事務局

齋藤 内線：8576
 第4回加齢研交流セミナー 対面開催
 日 時：令和5年3月31日（金）16時から
 17時10分
 講 師：モドミクス医学分野 小川亜希子
 講 師：基礎加齢報研究分野 白川龍太郎
 連絡先：加齢医学研究所・研究会事務局
 齋藤 内線：8576

場 所：加齢研実験研究棟7階セミナー室1
 および Web
 講 師：稲葉謙次
 所 属：東北大学多元物質科学研究所
 演 題：細胞における亜鉛恒常性維持とタ
 ンパク質恒常性維持
 担 当：山形 仁（所属 臨床加齢医学研究
 分野）

9. 加齢研研究会セミナー

http://www.idac.tohoku.ac.jp/site_ja/news-events/
<http://www.idac.tohoku.ac.jp/site/news-events/>

加齢研研究会セミナー

日 時：令和4年11月1日（火）午後4～
 5時（対面で開催）

場 所：加齢研実験研究棟7階セミナー室1

講 師：趙 民知

所 属：がん研究会 がん研究所 実験病
 理部

演 題：がんの悪性形質に寄与する染色体
 異数体化の変動

担 当：家村顕自（所属 分子腫瘍学研究分
 野）

日 時：令和4年12月21日（水）午後4～
 5時（対面で開催）

場 所：加齢研実験研究棟7階セミナー室1

講 師：山本 雅

所 属：沖縄科学技術大学院大学 細胞シグ
 ナルユニット

演 題：遺伝子発現制御の新たな展開：
 CCR4-NOT の役割

担 当：家村顕自（所属 分子腫瘍学研究分
 野）

日 時：令和5年1月26日（木）午後1時
 30分～3時（Webで開催）

日 時：令和5年2月17日（金）午後4～
 5時（対面で開催）

場 所：加齢研実験研究棟7階セミナー室1

講 師：伊藤健太郎

所 属：第一三共株式会社 研究開発本部
 オンコロジー第二研究所

演 題：抗がん剤創薬研究の現状と課題

担 当：家村顕自（所属 分子腫瘍学研究分
 野）

今後の予定

加齢研新人研修会

日 時：令和5年6月14日（水）午後1時
 15分から

令和3年度加齢研若手共同研究促進助成金成
 果報告会について

令和3年度加齢研若手共同研究促進助成金採
 択者による成果報告会を令和5年度新人研修会
 の後に行う予定です。

研究会総会

日 時：加齢研新人研修会終了後、午後5時
 から

場 所：加齢研 SA 棟1階ロビー

司 会：宇井彩子研究会委員長

1. 議長選出
2. 出席者・委任状の確認
3. 令和4年度度の決算報告

4. 令和5年予算(案)
5. その他

新入会員歓迎会

日時：研究会総会後、午後5時15分～
6時15分

場所：加齢研SA棟1階ロビー

第160回集談会(R5.7.14)での研究会第43回発表コンテスト

【研究会同窓会広報】

庶務幹事 山家智之

庶務報告

1. 研究会同窓会会員の確認(令和5年5月現在)

会員数2,185名

(所内在籍者201名, 所外728名(過去5年間の会費未納者は, 238名で加齢研ニュースは送付していません。)海外92名, 退会者620名, 物故者333名, 住所不明211名)

賛助会員 23施設

購読会員 17件

物故会員(令和4年12月～令和5年5月までの間に事務局に連絡がありました。)

三田地泰司先生 令和5年1月30日
抗研臨床癌化学療法

本多 三學先生 令和5年2月6日
抗研臨床癌化学療法

平野 富男先生 令和5年2月28日
抗研内科

2. 受賞報告

渡辺 彰 第26回秩父宮妃記念結核予防
功労賞・事業功労賞(個人)
R5.2.15

元 加齢研抗感染症薬開発寄附研究部門教授
現 東北文化学園大学 医療福祉学部 抗感

染症薬開発研究部門 兼 宮城県結核予防会

3. 第159回集談会

コロナウイルス感染拡大防止の為, Web開催。
日時：令和5年2月10日(金)午後1時から
ハイブリッド開催

一般口演10題

第30回加齢医学研究所研究奨励賞・受賞記念講演

30th IDAC Young Investigator Award Lecture
Psychological and neural mechanisms of body
image disturbance

Department of Psychology, Northumbria University

Yumi Hamamoto 東北大学加齢医学研究所
人間脳科学研究分野 濱本 裕美

Common and distinct neural bases of multiple
positive emotion regulation strategies: A functional
magnetic resonance imaging study

Department of Functional Brain Imaging, Institute of
Development, Aging and Cancer (IDAC),
Tohoku University Masayuki.Tsujimoto

東北大学加齢医学研究所応用脳科学研究分野
辻本 将之

4. 加齢研セミナー(令和4年12月～令和5年5月の間に開催されました。)

日時：令和4年12月5日(月)
午後6時～7時30分

場所：加齢研実験研究棟7階

セミナー室(1)

講師：Albert van der Vliet, Ph.D.

所属：Department of Pathology and Laboratory
Medicine, Larner

演題：QUO VADIS DUOX?

担当：遺伝子発現制御分野 本橋ほづみ

日時：令和5年1月26日（木）
午後4時～5時
場所：加齢研実験研究棟7階
セミナー室（1）
講師：細田 千尋
所属：東北大学加齢医学研究所脳科学研究
部門 認知行動脳科学研究分野
演題：well-being な学びの実現に向けた研究
担当：分子腫瘍学研究分野 田中 耕三

日時：令和5年3月1日（水）
午後1時30分～2時30分
場所：Web
講師：増谷 佳孝
所属：東北大学大学院医学系研究科 保健学
専攻 画像情報学分野
演題：機械学習による拡散MRI
担当：臨床加齢医学研究分野 瀧 靖之

日時：令和5年3月7日（火）
午後5時～6時30分
場所：加齢研スマート・エイジング棟1階国
際会議室, Web
講師：北嶋 俊輔
所属：公益財団法人がん研究会がん研究所
細胞生物部
演題：紡錘体チェックポイントキナーゼ
MPS1によるSTING経路の制御とが
ん免疫療法への応用
担当：分子腫瘍学研究分野 田中 耕三

日時：令和5年4月11日（火）
午後4時～5時
場所：加齢研スマート・エイジング棟1階国
際会議室, Web
講師：早野 元詞
所属：慶應義塾大学医学部精神科学教室
演題：老化のタイミングと速度を決定する

生物学的閾値
担当：分子腫瘍学研究分野 田中 耕三

日時：令和5年4月17日（月）午後4時～
場所：加齢研実験研究棟7階
セミナー室（1）
講師：小田 吉哉
所属：東京大学大学院医学系研究科
演題：アルツハイマー病血漿のマルチオミ
クス解析による仮説構築への挑戦
担当：モドミクス医学分野 魏 范研

日時：令和5年4月26日（水）
午後4時～5時
場所：加齢研スマート・エイジング棟1階国
際会議室
講師：村松里衣子
所属：国立精神・神経医療研究センター神経
研究所
演題：ミエリン依存的な脳機能回復メカニ
ズムと老化
担当：遺伝子発現制御分野 本橋ほづみ

5. 加齢研ニュース発行
78号 令和4年12月
79号 令和5年6月

今後の予定

1. 第160回集談会

日時：令和5年7月14日（金）午後1時か
ら 開催形式 対面を予定。
場所：加齢医学研究所 スマート・エイジ
ング研究棟 国際会議室
一般口演

2. 令和5年度加齢医学研究所研究会同窓会総
会, 懇親会（園遊会）

日時：令和5年7月14日（金）

総会 集談会終了後 開催形式 未定
懇親会（園遊会） 未定

3. 第 161 回集談会

日時：令和 6 年 1 月～2 月上旬頃予定。

場所：加齢医学研究所 スマート・エイジ
ング研究棟 国際会議室

4. 加齢研ニュース発行

80 号 令和 5 年 12 月

81 号 令和 6 年 6 月

[編集後記]

加齢研ニュース第 79 号をお届けいたします。今号では、新所長となられた田中耕三先生から所長室だよりを、遺伝子発現制御学分野から分野紹介のご寄稿をいただきました。また、昨年度で定年とられました高井俊行先生から随想をご寄稿いただきました。お忙しい中、寄稿していただいた先生方に心よりお礼申し上げます。新型コロナウイルスの流行のため、約 3 年間にわたり種々制限がかかっている中、加齢研ニュースによる情報交換は大きな役割を果たしてきました。これからも加齢研ニュースが、加齢研関係者のよりよい交流の場となるように活動していきたいと思っております。4 月からは BCP レベルが 0 となり、これまで制限されてきた対面での直接の交流、および加齢研行事が再開されることと思います。引き続き、加齢研ニュースにご支援、ご協力をお願いします。

(小笠原康悦)